
吸血鬼はガーデニングがお好き

徒耀子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吸血鬼はガーデニングがお好き

【Nコード】

N0586G

【作者名】

徒耀子

【あらすじ】

現代生活に紛れて暮らす吸血鬼のローレは、占い師として生計を立てている。うら若き女性の血を食糧とし、時には彼女達の悩み事の解決に乗り出す?!

黒のビロードをかけた丸テーブルには、ボブカットのおとなしそうな印象の女性が、滑らかな喉元をさらして突っ伏している。

薄がりのランプの下、ローレの小さな胸は幸福に満たされていた。「いただきます」

かすかな声で断ると、何度も味わっている鈴木真美の首筋に噛み付いた。犬歯が穿った穴から血が流れ落ち、ローレは無心で啜った。

職業、占い師。

性別、女。

年齢、忘却の彼方。

種族、吸血鬼。

食欲を満たしたローレは、本来の職務に戻った。催眠術にかけた客を相手に問いかける。

「今日はどういう理由で来られたのです？ 運氣を見てほしいって言ってみましたけど、真美さんの本心とは思えません。何か気にかかることがあるのでは？」

ローレのほうを向きながら、しかし焦点の合わない目つきで、真美は語り始めた。

「ここ二週間、誰かが家の前をうろついているんです。リビングにいと、人影が見えます。背丈はあまり高くないのですが、女性のようではありません。呼び鈴を鳴らすとか、そういう悪戯はないんです。ウロウロして、五分もすると、いなくなります……」

「ストーリーってことかしら？ その人物に心当たりは？」

ローレの問いかけに、真美は首を振った。

「ありません……」

催眠状態なのだから、嘘をついている可能性は限りなくゼロだ。本当に誰だか見当もつかないのだろう。

真美を目覚めさせる前に、ローレは唇に血の名残がないことを確認するべく手鏡を持ち上げた。

幾世紀を生きてもティーンエイジャーに間違われる幼い顔立ち。透けるような白い顔の周りを、ゆるいウエーブを描く濃褐色の髪が覆う。深緑の瞳と、ノミで刻んだような彫りの深さが、異国からやって来たことを告げている。

店を訪れる客達は、神秘的な風貌だと口々に褒める。しかし、整いすぎた顔というのは人形のように不気味だと、ローレ自身は感じていた。

香炉の炎を吹き消して、指を鳴らした。

真美の肩がビクツと震え、長いまつげに縁取られた瞳が瞬く。まだボンヤリしているが、ローレは身体を乗り出して言った。

「今、恐ろしい目に遭われているでしょう。私よりも別の相手に相談したほうがいいと思いますよ」

「本当に、何もかもお見通しですね」
常連である真美は驚かずに頷いた。

「確かに、付きまとわれているみたい、と感じることはありません。でも、私の考えすぎかもしれません。うちは賃貸マンションです。まるで自分自身に言い聞かせるような口ぶり。」

ローレは事態の深刻さを示すように、眉間に皺を寄せた。

「何かがあつてからでは遅いですわ」
「そうですね……」

真美は視線を落とした。不安を感じているのだろうが、はつきりと助けを求めるまでには、気持ちが定まっていないようだ。もしくは、現実を認めたくないのかもしれない。

（だから、「私の運気はどうですか？」なんて、あやふやなことを聞きに来たのね。なんて、いじらしい人！）

ローレは占い師として生計を立てているが、未来が見えるという特殊能力は持っていない。得意の歌で催眠術にかけて、客から話を聞くだけだ。

自分がどうなるのか、何が起きるのか、一番わかっているのは本人。それがローレの認識だった。

詐欺まがいのやり方でも、評判は上々だった。値段がリーズナブルということもあって、客足が途絶える日はない。

特に、気に入ったお客には格安回数券を販売して、しばしば足を運んでくれるように仕向けている。道端に咲くスミレのように控えめで可憐な真美はその一人。

「あ。もう時間を過ぎてますね。また来ます」

真美が立ち上がり、ローレも見送ろうと腰を上げる。先に黒いビロードのカーテンをくぐった真美は叫び声を上げた。

「きゃあっ」

玄関には、一見すると中型犬に見える生物が寝そべっていた。

「びっくりした……犬を飼い始めたんですか？」

一見すると、茶色い毛皮にくるまれた生物は、中型犬に見える。

「公園の野良だったんですけど、いつの間にか居ついてしまってお嫌いでしたか？」

ローレが問いかけると、足元の獣は、顔を上げて切なそうにクワンとないた。真美は顔をひきつらせながらも、首を横に振る。

「い、いいえ。苦手なだけですっ」

思わず、ローレの口元がほころぶ。

（本当にかわいい人ね。真美さんを苦しめている奴なんて、この手で首を絞めてやりたいわ）

真美が出て行き、扉が閉まると、幸次郎は起き上がった。

伸びをして、体をゆっくりほぐしていくと、前脚は人間の腕、後ろは脚になり、凜々しい裸の青年が現れる。

「ストーカーだなんて、物騒な話ですねえ。ローレさんもお気をつけください」

「乙女の目の前で、汚いモノをさらすんじゃないと何度言わせるの」

「あっ、ひどい」

幸次郎は嘆きながらも、切れ長の瞳でひたと見据えた。

「それでも、僕はローレさんをお慕いしております」
「天変地異でも起きない限り、私が応じることはないわ。これも何
度も言ったでしょ。日本の人狼は絶滅寸前なのだから、早いところ、
里へ帰って交配することをオススメするわよ」
しかし、とことん前向きな幸次郎はニッコリした。
「東京大地震つて、そろそろ起きる頃らしいですよ」

2

「ストーリー被害を訴えていた女性、殺害される」

心の中で漠然と渦巻いていた不安が、ニュースのテロップを見た
とたんにはじけた。

「出かけましょう、幸次郎」

鈴木真美の住所ならば知っている。ローレの経営する占いの館『
ローレライ』には顧客名簿が存在し、住所を登録しておくとお得
なキャンペーン情報などがハガキで届く仕組みになっている。

但し書きには、それ以外に個人情報を利用しないと明言している
ので、今回の行為は違反になるが……

「元の姿に戻って。すぐに行きたいの」

「買い物には遅い時間ですよ」

幸次郎は不思議そうに、ソファから立ちあがったローレを見た。

「近頃、家事を僕に押し付けているローレさんはお忘れになったか
もしれませんが、大通りのスーパーもドラッグストアもすでに閉店
しています。コンビニくらいしか営業していません」

「真美さんの様子を見に行くの？。幸次郎は犬代わりよ。早くしな
いと毛皮にするわよっ」

失言だった。幸次郎は怯えるどころか、大喜びしてしまった。

「ローレさんの身にまとわれるなら本望ですっ。ぜひコートに仕立
てて、裸の上に着てください」

「嫌よ、気持ちの悪い。絨毯にして毎日踏んでやるわっ」

「そのシチュエーションもグツとききます」

幸次郎はやつと、金色の毛に覆われたオオカミの姿に戻った。絶滅種といつても、凶暴な顔つきの中型犬にしか見えない。

首輪と散歩用のロープを付けられて、誇り高い人狼であるはずの幸次郎は、怒るところか大興奮だった。

（お散歩プレイだとか思ってるんだわ……相手にすると疲れるから、無視無視）

出発前なのに、かなり体力を消耗してしまった。

変化を解いた幸次郎を連れて、電車やバスに乗ることはできない。タクシーも断られてしまうが、真美の家までは二駅なので歩くことにした。

三十分ほどで駅前に到着した。

電車の改札の先にバスターミナルがあった。綺麗に整備されていて、スーパ―やDVDレンタルショップやファーストフード店が軒を連ねる。この時間でもネオンが明るく、深夜になっても賑わいは続きそうだった。

真美の住むマンションは、駅から四分程度だった。コンビニを通り過ぎ、レンガ敷きの大通りから外れることなく行ける。

「割と安全じゃない。帰り道に襲われる危険はなさそうね」

ローレは声を落として、独り言のように幸次郎へ話しかけた。

しかし、建物の中へ進むにつれ、不安がむくむくと大きくなった。オートロックでないことに目を瞑るとしても、真美の部屋は一階で、しかも、奥まった場所にあった。

目隠しに植えられた沈丁花の生垣が、ベランダだけでなく、玄関口にも進出しており、あらゆる視線を遮る。

「部外者がいても、この部屋の近くまで来なければ分からない………まずいわね」

幸次郎がロープを強く引っ張った。ローレが離してやると、玄関口のコンクリートへ跳んでいった。

鼻をつけるようにして匂いを嗅ぎ、レースのカーテンがかかった出窓に近づいて、その下の地面も調べる。

カーテンが少し揺れた。

すぐに玄関が開いて、安堵と困惑の入り混じった表情の真美が出てきた。

「ローレさん。こんな時間に……どうしたんですか？」

「ごめんなさい。出すぎた真似だとは思ったのですが、真美さんのことが気になってしまって」

素直に謝ると、真美は今にも泣き出しそうに顔を歪めた。

「実は さつきまで居たんです。十分くらい前。すごく怖かった」
まるで追い詰められた小動物のように震えている。

「今また、カーテン越しに影が見えて。また戻ってきたのかと思っ
た」

「怖い思いをさせてしまいましたね。ごめんなさい」

真美は「いいんです、いいんです」と首を横に振った。

「来てくれて良かったです。一人ぼっちで震えながら部屋にいて、
頭がおかしく、なっけてしまいそうだった……」

思わず、ローレは真美の手を取った。吸血鬼である自分の手を暖
かく感じるほど、その手は冷えていた。

幸次郎がローレの脚に身体をこすり付けてきた。何を伝えようと
しているのか、すぐにピンと来た。

(ストーカーがいたのはついさっき。匂いはまだ新しい)

「幸次郎が追跡できるそうです。奴を捕まえられるかも。私、行っ
てきますね」

しかし、真美は少しも嬉しそうではなかった。黒目がちの瞳が潤
んでいる。

「置いていかないで。怖い」

では、一緒に行きましょう と言いかけて、ローレは言葉を飲
み込んだ。恐怖に押しつぶされそうな真美を、その元凶と対峙させ
ることは。

(さすがに酷か)

「幸次郎、一人で行って。お願いね」

腐っても狩りをする生き物である。幸次郎は、獲物の匂いを追いかけて跳ぶように走り出した。

ローレは、真美の震える肩に手を回し、部屋の中へ入った。

「仕事が終わって、駅前のスーパーへ寄った後に帰ってきました。食材を冷蔵庫に入れて、窓をふつと見たら人影が」

「さぞ怖かったでしょう。でも、もう大丈夫ですよ」

真美を落ち着かせるために、ローレは他愛ない話をした。

幸次郎が戻ってきた時には、真美は平常心をだいぶ取り戻していた。

「私達が帰ったら、すぐにベッドへ入ってしまうことですね。今日はもう何も起きないでしょう」

ローレは別れの挨拶をしながら、声に歌の響きを軽く含ませた。

玄関を閉めた真美は、心配事を思い浮かべる暇もなく、深い眠りに落ちるだろう。

3

「で、どうだったの？ ストーカーの正体は突き止められたの？」

家に帰るや、ローレは問い詰めた。

しかし、幸次郎はローレの視線から逃れるように下を向き、寝室へ引っ込んだ。間もなくして、バスローブを羽織った姿で現れた。

「行けるところまでは行っただんですが……」

「どういうことっ？」

「駅前にレンタルショップがありましたよね。匂いは中に続いていまして……僕一人ではその先を追うことができなかつたんです。ケモノは店内立ち入り禁止ですから」

幸次郎は、大きな身体を縮めるようにして、恐ろしそうにローレの顔を見つめた。

「役立たずっ。人間に変身すれば、中に入れたでしょうに」

「無理ですってば。服なんか持っていかなかつたでしょう？ 変質者扱いされて捕まります」

ローレはため息をつき、ソファに腰を下ろして腕組みした。

「ストーリーカーは、あの付近に住んでいる可能性が高いわね」

「どうしてですか？」

「レンタルショップでDVDやCDを借りたら、返却しなければなら
ないわ。だから、大抵の人は、自宅近くの店舗を利用すると思っ
の」

「確かに、そうですね」

ローレは祈るように夜空の星を見上げた。

(このまま、何も起こらなければいいけれど)

4

二日後の夕方、電話のベルがけたたましく鳴った。

「はい、こちらローレライ」

向こうは無言だった。イタズラだと思って、電話を切ろうとした
時、途切れ途切れの声を受話器から聞こえた。

「郵便ポストの、鍵が……壊されていたんです……」

電話の向こうの真美は、堪えきれなくなったようで、ワツと泣
き出した。ローレは「すぐに行きます」と答えて電話を切った。

幸次郎を呼んで手短に説明した。

「僕、元の姿に戻ったほうがいいですか？」

「人間の姿でいて。前日みたいに暢気に歩いている暇はないから」
タクシーを拾い、マンション前へ乗りつけた。マンションを入っ
てすぐにある郵便ポストを見ると、真美の部屋の南京錠だけが壊さ
れていた。ペンチを使って、力任せにこじ開けたようだ。

「ここの匂いを調べて。私は真美さんの様子を見てくる」

幸次郎は物陰でオオカミへ戻った。ローレは服一式を拾ってバッ
グに押し込め、真美の部屋へ突進した。

玄関を開けた真美は蒼白で、いつ倒れてもおかしくなかった。

「ごめんなさい……。ローレさんに頼ることじゃないって、分かっ
ているんですけど……」

「遠慮なんてしないでくださいな。私が来たからには、もう大丈夫」
真美は力なく「ありがとう」とつぶやいた。

このままでは神経が持つかどうか。ローレはちょっと考えて、眠りの歌を歌った。

真美はあっけなく倒れた。涙に濡れた顔が安らかな寝顔に変わる。オオカミの姿の幸次郎を招きいれて、服の入ったバッグを前に置いて背中を向けた。

「この前の匂いと同じです」

背中越しに幸次郎の言葉を聞き、ローレは息を吸い込んだ。

「そいつ、捕まえましょう」

5

鈴木真美は、毎日、人影が現れると言って怯えていた。

それならば、今日も来るはずだ。

「電気を消して、暗い部屋の中で身体を寄せ合って 妙にドキドキするんですが」

幸次郎が己の状態を打ち明けた。

「まあ、その心臓は不良品ね。とめたほうがよろしくてよ。何なら、お手伝いしましょうか」

ローレがわざと猫なで声で申し出ると、幸次郎はあわてて断った。

「お手を煩わせるには及びません」

ローレは、室内に人がいると知らせるために明かりをつけ、窓を細めに開けておいた。外からは見えないように、出窓の下に二人並んで座り込む。

「……退屈ですね」

幸次郎がぼつりとつぶやいた。

「五百年近く生きていくせに、二時間程度で飽きてしまうわけ？」
「時の流れる速度は、五百年過ごそうが、五十年過ごそうが、変わりません。特に、やることが何もない場合には」

心底退屈そうに息を吐き、ささやくように尋ねた。

「僕は人間が好きですけど　ローレさんは違いますよね。今回は傍観するのかと思っていましたよ。むしろ、そのほうがローレさんらしい気がしますね」

ローレは唇を舐めて、言い表す言葉を搜した。

「……花のお手入れのようなものよ」

「はい？」

「吸血鬼にとって、人間は欠かせないモノだね。気に入った花は健やかに育つように面倒を見なさいって　これは、私の一族の教えなの」

「今は、害虫駆除の最中だというわけですか」

幸次郎は微笑して、形のよい鼻で空気の匂いを嗅ぎ分けた。

「獲物がかかりました。あなたの花を汚すものは、僕にとっても敵です。何なりとご命令ください」

「元の姿に戻ってちょうだい。窓際ギリギリまで近づいてきたら合図して」

つややかな毛皮に覆われた幸次郎を、ローレは膝の上に抱いた。

金色のオオカミは幸せそうに細い腕に顔を乗せる。

一歩。二歩。

幸次郎が赤い舌を出して、ローレの腕を舐めた。その瞬間、ローレは口を開いた。

狙い定めて、対象者のみに届くようにと絞った音量で。

言葉とは違う、海のざわめきに似た響きで空気を震わす。

窓の向こうで、身体が地面にぶつかる音がした。満足して口の端を吊り上げたローレは、腕の中の幸次郎が気持ちよさそうに寝息を立てていることに気づいた。

「あら、耳を塞いであげなくちゃだったわね」

一人笑いを漏らして、幸次郎を床へ寝かせた。

6

外へ出ると、高校生らしき男の子が倒れていた。

彼は、白シャツの上にベージュのベストを重ねて、下は緑のチェツクのズボンという制服姿だった。ネクタイは外しているのか、つけていない。

小柄でアイドルみたいな可愛い顔をしていたが、だからといって評価が上がるわけでもなく。

ローレはシャツの襟をつかみ、乱暴に室内へ引きずり込んだ。服が汚れようが、関わりのあることではない。

幸次郎を起こして近くに座らせ、逃げられないように玄関口に背中を向ける。

「こんばんは、ストーカーさん」

目覚めたアイドル君（仮名）は顔を引きつらせた。しかし、すぐに虚勢をはって、馬鹿にするようにローレの顔を見返した。

「はあ？ 何のことだよ」

「真美さんは怖がっていたわ。だから私、あなたのこと、とつても怒っているの」

ローレは凄んだりしなかった。淡々と話しかけながら、幸次郎の頭を撫でる。滅多にないことに、幸次郎はうつとりして目を細める。

「この子、犬に見えるでしょ？ でも、オオカミなの。ニホンオオカミ」

「嘘言っくんじゃねーよ」

「信じないなら別にいいわ。犬でもオオカミでも、この牙の鋭さは変わらないもの。ほら、幸次郎、口を開けて」

ズラリと並んだ歯を見せ付けられて、アイドル君は息を呑んだ。

ローレは薄い笑みを浮かべた。

「ねえ、噛み付かれたら、きつと痛いわね？」

白熱灯の下で、相手の青ざめる様子がありありと見て取れる。与えた恐怖のほどを確認して、ローレは強い口調で言った。

「真美さんに二度とつきまとわないで。私が言いたいのはそれだけ。おわかり？」

だが、アイドル君は強情に口を引き結んでいた。ローレは元々、

穏やかな性質ではない。怒りは瞬時に沸点へと達してしまった。

「わからないなら、身体にキツチリ教えてあげる」

幸次郎はちよつと嫌そうに身体をひねったが、ローレは無理やり押さえ込んだ。

「さつき、何でもするって言ったじゃないの。ほらっ、やっておいまい！」

観念した幸次郎は跳躍して、アイドル君の直前にまで迫った。

「うわぁっ」

「ストーカー行為の報いよ。覚悟なさい」

アイドル君は可愛らしい顔に冷や汗を流し、壁際に追い詰められながら叫んだ。

「違っつ。俺は怖がらせるつもりじゃなかったっ。す……好きなんだっ！」

「あら、ありがとう。せつかくだけど、男性は嫌いなのよ。ごめんなさいね」

ローレは一瞬もためらうことなく断った。

「あんたじゃねえよっ」

「もしかして、真美さんを？ 嫌がらせしてたくせに戯言を」

「だから、違っつっの！」

アイドル君は、首を上げしく横に振り、切羽詰って告白した。

「あの人のこと、街中で見かけて、ずつと気になってたんだ。家を突き止めて、でも、どうしたらいいか分かんなくて……」

「じゃあ、ポストの鍵を壊したのは何故？」

「あれは 手紙を書いたんだけど、やっぱ恥ずかしくなって。取り出すためにやったんだ」

アイドル君は顔を火照らせてうつむいた。ローレがじろじろと眺めると、耳まで赤く染まった。

「嘘じゃないみたいね。そう……」

考え込んだのは少しの間で、すぐに答えを弾き出した。

「好意だろっが悪意だろっが、迷惑だったことに変わりなし。よっ

て、斟酌の余地はありません。幸次郎、お行き！」

しかし、幸次郎は立ち止まったままだ。

「どうしたのよっ？」

自分が脱いだ服を口にくわえ、幸次郎はトコトコと歩いて奥の部屋へ消えた。数分も経たないうちに、人間に変身した幸次郎が飛び出してくる。

「恋心が膨らんで、歯止めが利かなくなる気持ち、僕には分かりません！」

「……どっちの味方なの？」

「もちろん、ローレさん一筋ですよ！」

しかし、幸次郎は同じ口で頼み込む。

「どうか見逃してあげてくださいっ！」

「だめよ！ 真美さんに、また怖い思いをさせるかもしれないじゃない」

「させないですよねっ？」

幸次郎はいきなり、アイドル君へ振った。

「知らなかったんでしよう？ 真美さんが嫌がっていること」

「うん うん」

アイドル君はしょんぼりして頷いた。だが、ローレは容赦なく冷たい口調で言い放った。

「ポストの鍵まで壊されたら、誰だって気持ち悪いわ。少し考えれば、分かりそうなものでしょうに」

アイドル君はますますうなだれた。その様子は、幸次郎の胸を強く打ったようだ。

「真美さんは今、彼氏いないですよね。だったら、彼にもチャンスはあると……」

「扉越しに会話を盗み聞きしたわね？」

ローレは眉間に皺を寄せて睨みつけた。普段なら幸次郎はたじろぐはずだが、自分の思いつきに酔っているのか、ちっとも応えていないようだった。

「ローレさんは言いましたよね。花が綺麗に咲くようにするのは当然だと。害になるものを取り除くだけではなく、栄養をあげること、手入れには必要ですよ」
確かに、そうかもしれない。しかし、果たして、このアイドル君が栄養になるのだろうか。

一連の行動からして、非常に疑わしかった。常識外れの行動をして、真美に迷惑をかける可能性のほうが大きい気がする。

「もし、真美さんに被害が出たときには、僕が責任をもって成敗します！」

幸次郎が力強く宣言した。

アイドル君のクリツとした瞳と幸次郎の切れ長の瞳に見つめられ、ローレは深い溜息をついた。

7

三日後の日曜日、快晴。

ローレは、真美の家を訪れる約束を取り付けていた。オオカミの姿に戻った幸次郎も一緒だ。

駅前のレンタルDVDショップの前に立つ真美の姿が見えた途端、幸次郎が突然走り出した。

勢いの強さに、ローレの手からロープが離れる。目の前に迫ってくる幸次郎に驚いて、犬嫌いの真美は悲鳴を上げた。

店内から出てきたばかりの高校生が気づいて、真美の前に立ちふさがった。近寄ってきた幸次郎の頭を「よしよし」と撫でてやる。

「大丈夫ですか？ 犬は嫌いなんですね」

「……少し、苦手なの。ありがとう」

全速力よりも遙かに遅い速度で、ローレがその場に駆けつけた。

「真美さん、ごめんなさい。幸次郎が興奮してしまっただけ」

心臓のあたりを押さえている真美を見ると、胸が痛んだ。しかし、予定通りにアイドル君のほうを向いた。

「どうも、ありがとう。お名前は？」

「こ、小池徹郎です」

アイドル君の顔にほんのりと朱がさす。

(あーもう。こんな茶番劇を引き受けるのではなかったわ)

ローレは後悔しながらも、作り笑いを浮かべた。

「ぜひ、お礼をさせて。真美さんにもお詫びしたいわ。近くの喫茶店で甘いものでもいかが」

真美は少し戸惑ったようだが、嫌ではなさそうだった。

「ええ。それじゃあ、私がよく行くお店を紹介します」

幸次郎が嬉しそうにパタパタと尻尾を振った。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0586g/>

吸血鬼はガーデニングがお好き

2010年10月8日15時10分発行